

「天宮」の構築

稲宮 健一

一九六二年五月、大隈講堂でソ連のカガーリン宇宙飛行士の講演を聞いた。質疑応答の後、自分は真の共産主義者であって欲しいとの締め括りの辞で会場を去っていった。当時冷戦の真つ只中、ソ連が一步先を歩んでいた。膨大な国家予算を使い、西側と覇を競っているときの心象であった。ベルリンの壁崩落以前の冷戦下であっても、宇宙は平和利用に徹していたので、米ソに間の対話を通じ両者の宇宙船をドッキングさせるアポロ・ソユーズ計画が実現し、これが後の国際宇宙ステーション（ISS）での共同運用に繋がった。

中国の宇宙開発は両者に遅れていたが、後追でも着実に進んでいる。二〇〇七年に一度ISSへの参加を試みたが、この時、軌道上の衛星を破壊する軍事利用に手を付けたため参加はできなかった。以降、独自路線を歩み出した。既開発の技術の遺産を活用し、経済成長に背中を押され、更なる発展を続けている。現在、ISSに相当する「天宮」計画の構築を進めている。一方、ISSは建設から三八年が経ち、寿命の延長が持ち上がっている。天宮はISS同様な機能をこれから開始し、ゆくゆくは月、火星探査に繋げたい夢の構想である。

宇宙技術は軍事用と直接は距離があり、割合オープンである。従って、キー技術以外は参考文献などで後追できる。しかし、先頭に立った以降は試行錯誤しかない。その段階に入ると開発速度は遅くなる。さらに、宇宙開発は常に隠れた欠陥との闘いである。NASAの場合、本流のプロジェクトとは独立した安全管理者の組織、即ち裁判所の役割をする横の専門部門があり、安全に疑義があるとプロジェクトの進行を停止させる権限をもつ。これにより全体の完全性を高めている。果たして、中央集権的国家の組織にこれ相当の機能が働くか課題だ。

天宮プロジェクトが拡大するほど、多国間の参加、協調が必須になるだろう。その時、第三世界のリーダーが他国を参加させてやるの態度では世界国家らしくない。

注一…スプートニクの打上は一九五七年

注二：完全性は System integrity